

去卯月朔日、豊前國岩石城於攻口、碎手忠節神妙、爲褒美四百俵之地、以目錄令扶持畢、全可知行、彌可抽戰功之狀如件。

天正十五年
八月七日

利 勝 在判

大平左馬助殿

十月十四日。四郎三郎等、田所に、田地を返却す。

【乘念寺文書】 鹿島郡

一九七三

田地之當町ぢない以を、さ藤五郎連申候くばうの御く用まかりならね、隨而六俵半之代物以を、藤五郎各ゑかへし可申候。仍而爲後日狀如件。

天正拾五 十月十四日

四郎三郎 略押

ちくご

さ藤さへ 略押

鳥 居 在判

りやうけはん(略押)

さ藤五郎 在判

田所かうづけ殿 參

(この文書は意味難解なり。)

十二月十一日。前田利家、伊達政宗に、その豊臣秀吉と好を通ぜるを祝す。

【伊達家文書】

一九七四

思召寄預御使札、本望至存候。殊見事之御馬二疋黒毛送給候。御懇信之段誠難申謝候。就其此般秀吉關白様へ御音信被仰上、尤珍重存候。即相添使者指上候處、御兩使仕合能、我等迄満足不過之候。次御使節如才覺、於于向後互無御隔意可申談覺悟候。隨而雖不珍候、小袖五并鞍二口惣梨地紋人令進覽之候。聊御音問之驗計候。如何様自是可申候條聞筆候。恐々謹言。

十二月。前田利家、羽咋郡押水の内四十ヶ村新開の租額を定む。

【赤池文書】 羽咋郡

一九七五

伊達左京大夫殿

十二月。前田利家、羽咋郡押水の内四十ヶ村新開の租額を定む。

【赤池文書】 羽咋郡

一九七五

押水之内四拾村

定

一、當村新開壹反ニ付て壹俵宛之事。

一、當新村三年之間不可有諸役之事。

右所定仍如件。

天正十五年十二月日

(前田利家) 在 印

(國初遺文には押水内九十九村に作れり、非なるべし。)

天正十六年

戊子

紀元二二四八

二月廿三日。前田利家、鳳至郡荒屋組に、百姓を有せざる林文右衛門尉知行所の地を開墾すべきを命す。

【能登國古文書】

一九七六

林文右衛門尉分の百姓無之由候。あら屋ぐみの百姓中わり合可開候。若荒候共、組中の百姓にかゝり可收納候。爲其申遣候也。

天正十六年

二月廿三日

(前田利家) 在 印

あらや本郷 三郎左衛門所へ

四月五日。前田利家、伊達政宗に、鷹を豊臣秀吉に献すべきことを促す。

【伊達家文書】

一九七七

熊令啓達候。舊冬者以御使節被仰上、則御返事申渡候キ。定可爲參着候。隨而關白様御鷹被爲數寄候ニ付而、被成御書候條、可然鷹御進上尤存候。方々へ被仰遣候間、鷹數多者不入申候。黃鷹鳥屋にても、能鷹尾羽を不打候て、鷹師ニ被入御念御進上可然候。將亦最上与御間之儀、非指御遺恨候者可有一和之由、從富田左近將監方被申越旨候。如何可有之候哉、以御分別御入魂專用に候。猶自是可申入候間不能審候。恐々謹言。

(天正十六年)

卯月五日

利 家 在判

伊達左京大夫殿

御宿所

羽柴筑前守